

稱讃 二四一号

二〇二三年一月一日発行



まこと し かな
誠に知んぬ。悲しきかな、
ぐとくらん あいよく こうかい ちんもつ
愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、
みより たいせん めいわく
名利の太山に迷惑して、
じようじゆ かず い よろこ
定聚の数に入ることを喜ばず、
しんしろう さとり ちか たの
真証の証に近づくことを快しまざる
ことを、
は いた
恥ずべし傷むべしと。

『教行信証』信卷（逆謗摂取）

昨年二〇二二年は、COVID-19感染の第六波、二月のロシアによるウクライナ侵攻に始まりました。

感染の第七波が収まった昨秋より国内外の旅行も緩和され、外食も制限されなくなりましたが、円安、物価高騰で明るい年だったとは、とても言えませんでしたが、十二月のサッカーワールドカップで日本代

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com



謹んで新春のお慶びを申しあげます。

表の大活躍には、寝るのを惜しみ、テレビを見て心躍ったことでした。クロアチアに負けて、ニュースを視たとき、「各国がウクライナへの「支援疲れ」を危惧していることを知りました。その中で、自身の生活そのものが困窮している人が、「これ以上支援出来ない」との訴えを聞きました。本

当に「疲れている」のは、ウクライナの人たちではないのかとも思いながらも、あらためて、自分の生活を振り返ると、昨春はあれだけロシアのウクライナへの侵攻状況を毎日のように気にしていたのに、現在、どうなっているかと心配もせず、生活に困窮している方の状況も知らうともせず、自分で出来るSDGsの取り組みもせず、旧統一教会への被害者救済新法案の成立もどこか他人事のように聞いておりました。

養老孟司氏は、私の大切な言葉との問いに、迷わず「蟲」と応えておられ「だいたいの人の苦勞って、他人が自分をどう思うかっていう「他人の目」ですからと。

先の私の反省みたいなことも、他人の目を気にしてのことのようです。親鸞聖人の「恥ずべし、傷むべし」に沿うと思っていたのですが、とんでもない傲慢な私の心でした。

未だに、ウクライナ侵攻も、第八波の感染が続いております。「世のなか安穩なれ仏法ひろまれ」とお念仏相続を心得る一年でありたいと思います。

宗祖親鸞聖人報恩講

日時 十二月十八日(日) 午後一時

お天気も持ちこたえて、令和四年、最後の恒例法要であります報恩講をお迎えすることができました。

早崎光弘さん、高橋八重子さん、安達光



成さん、中木原乃既子さん、福井恒彰さんがご参拝くださいました。ようこそ、ようこそそのお参りでございました。

また、当日は来られないとのご返事を頂いたり、事前にお参りくださり、ご懇志くださいまして、ありがとうございます。

この度の報恩講では、御本典作法(音楽法要)、正信偈(行譜)、六首引き(「釈迦弥陀は慈悲の父母」から)をおつとめいたしました。

その後、住職がお話させていただきました。

明るい話題に乏しかったこの一年でしたが、サッカーワールドカップで日本代表が大活躍したことは、日本中を明るくしてくれた気がします。「ブラボー」が流行りました。実況中継の人は、「ドーハの悲劇からドーハの歓喜」と讃えました。そして、監督、選手、スタッフの誰もが「奇跡ではなく、必然だ」と鼓舞しました。

「必然」と聞いて、思い浮かべるのは、阿弥陀さまのご本願のはたらきです。

あゝ、ぐぜい、ごうせん、たしやう
 噫、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく
 しんじつ、じようしん、おくう

真実の淨信、億劫にも獲がたし
 たまたま、ぎようしん、とほ、しゆくえん、よすつ

遇、行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ
 「必然」の反対は、「偶然」ですが、ニ

ンベン「偶」は「たまに」というぐらい人為であります。シンニョウの「遇」は「もてなす」の意味があります。阿弥陀さ



まの大慈悲に私の方からは値えない、気づきようがありませんが、阿弥陀さまの方からは、私が常にどこでどんな状況であろうと、「必然」としてはたらいておられる。

「遇」は、阿弥陀さまが迎えてくださっていることに気づかされる「あう」なのか、私が素直に尊崇の意を込めて阿弥陀さまのお心を受け入れている「あう」なのか、その両方なのでしょう。

現世利益和讃について

十三首目

なもあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふれば

かんのんせいし

観音勢至はもろともに

ごうじゃんじゅ

ぼさつ

恒沙塵数の菩薩と

かげのごとくに身にそへり

観音菩薩と勢至菩薩は、脇士と言って阿弥陀さまの左右におられる菩薩です。観音・勢至と、観音の化身である無数の菩薩、勢至の化身である無数の菩薩とが一緒になって、念仏する人、影のように添って片時も離れることがないという意味です。私の影というものは、いつも私を離れないでしょう。私が歩いたら影も歩くし、私が止まれば影も止まります。そのようにぴったり離れずに、菩薩さまたちが念仏する私を護ってくださいなのです。

観音さまは、阿弥陀さまの慈悲の面の象徴です。一方、勢至菩薩は阿弥陀さまの智慧の象徴です。阿弥陀さまご自身は、限らない慈悲と限らない智慧との両面を一身に兼ね備えておられるのです。

哲学という学問は、理屈好きで薄情な人間がする学問だと思っておられるとしたら、これは

根本的な誤解です。薄情な人が考えた哲学は本当の哲学ではありません。本当の哲学者の本質は、感情が生き生きとしていて豊かです。たとえば、大哲学者の西田幾多郎先生に「哲学とは一体どんな学問ですか」と尋ねた人がいたそうです。皆さんもこの疑問をお持ちかと思いますが、物理学や生物学ならわかるけれども、哲学は一体何を研究する学なのかもう一つよくわからないというのが、正直な印象ではないでしょうか。ところが、この問いに対する西田博士の答えは、「そうだなあ、まあ人情を研究する学問かな」だったそうです。人間存在の核心は情であって知ではないということ、西田先生はいろいろな著書の中に書いています。情が正しくなかったら、その人の考えはどこかおかしくなってきます。頭の良い人が正しいことを考えるとは限りません。情の本質は、相手の立場になつてものを考える心の働きのことです。この情が生き生きとしてなかったら、どんなに知的であつてもだめなのです。

さすがに西田幾多郎の名言です。普通の人間、哲学はあらゆる学問の根本の学だという答えで済ませることでしょう。大学の哲学の授業では誰でも聞かされることで、これでも誤りではないのですが、西田はもっと端的に哲学とは人情の研究だと言ったのです。数学や物理学は人情を研究することはできません。心理学は人間の心を対象として知的に分析している学問です。ところが、哲学というものは他の学問ではできない、そもそも人間とは何かということ、人間精神の本質を研究する学です。その方法は、研究する事柄そのものに自分がなり切って考えるということです。しかし、この相手の立

場になり切ることが本場にできるのは、何と言つても阿弥陀さまです。五劫の思惟の本願が成就して衆生の苦しみが自分自身の苦しみになったから、衆生を助けたいではおられないのです。阿弥陀さまは、智慧と慈悲の両方を兼ね備えておられます。仏智は衆生のことを全部見抜いておられます。

その智慧の面の勢至菩薩と慈悲の面の観音菩薩が、化身であるたくさんさんの菩薩をとまなつて、念仏の人の身に添うようにして護ってください、とこの和讃です。だからお念仏を称える人は、観音さまの慈悲に染まった優しい人です。そして同時に賢い人です。賢いというのは、頭が良いという意味ではなく、本当のことを知らされているということです。それは、阿弥陀さまに助けていただかなかったら自分はどうにもならない人間だということを知っているということです。

「浄土に往けるかどうか、よく考えることにします」と言っているような人は愚者だと、蓮如上人はおっしゃっています。凡夫の分際でわからない次元のことを、わかるように思っているからです。だから仏法を聞かない人は、どこまで行っても愚者なのです。反対に、阿弥陀さまのお助けを少しも疑っていない人は賢い人です。なぜなら、その人は阿弥陀さまの智慧をいただいている人だからです。阿弥陀さまがお前は仏になるとおっしゃる言葉をそのままいただくことが信心であり、これはとりもなおさず阿弥陀さまの智慧を自分にいただくことでありますから、「信心の智慧」と言われるのです。信心の人は本当の優しさを持っています。思いやりがあつて、困っている人に優しく接すること

とができるのです。信心のない優しさは自分中心の思いが混じっていますから、本当の優しさとは言えないのでしょうか。

このように、南無阿弥陀仏を称える人には、阿弥陀さまの二つの徳である大智と大悲が自然に備わるのです。つまり、観音・勢至が影のようにその人に付いて離れられないのです。この観音・勢至が念仏者に影のようにぴたりと添われるという表現は、これまでの神々に護られるという表現よりも、ぐんと内面的で直接的に感じられます。

（『生命環流・浄土和讃を読む下』

大峯 顕氏 著）

お念仏に親しませていただくと、それまで思ってもよらなかったものの見方ができるようになります。

榎本栄一さんに「ぞうきんの詩」というのがあります。「ぞうきんは、他のよごれを、いっしょうけんめい拭いて、自分は、よごれにまみれている」。この詩を近所のお寺の掲示板で見るとき、胸が熱くなるのを覚えしました。ぞうきんは他のよごれを拭いて、自分はよごれにまみれ、しかも自分の働きを認められることも期待せず、やがてぼろぼろになり捨てられていくのです。そこから、私たちがどれだけ捨てても、私たちをお捨てにならない阿弥陀如来や観音菩薩のお慈悲のすがたを連想します。

私たちがお念仏の教えに親しませていただいたからといって、ぞうきんのようにわが身を捨てて、他のために尽くすことはできないかもされません。けれども、このぞうきんを拝めるような心を起こさせていただくことはできるで

しょう。このぞうきんを拝む心を起こさせているのは、念仏者の身に観音菩薩がよりそっていただくからだと味わえます。

また、私たちは綾や錦の高価な織物は尊びますが、木綿やぞうきんは価値の低いものと見下しがちです。けれども教えを身につけさせていただくのと、どんなものにも、分け隔てない平等の値打ちを気づかせられるのです。それは、勢至菩薩がついてくださるからだと味わえます。

（『聖典セミナー 浄土和讃』

黒田 覚忍氏 著）

この和讃は、『唯信抄文意』の「如来尊号甚分明 十方世界普流行 但有称名皆得往 観音勢至自来迎」の解説に詳しく説かれているのでありますが、「ぞうきんの詩」で思うのは、同じく『唯信抄文意』の「能令瓦礫變成金」の次の解説です。（「真筆本」と「正嘉本」があり、「真筆本」を取りあげます）

のうりようがやくへんじようこん

「能令瓦礫變成金」といふは、・・・

かはら・つぶてをこがねにかへなさしめんがごとしとたとへたまへるなり。れふし・

びと

あき人、さまざまのものは、みな、いし・

かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。

によらい おん

如来の御ちかひをふたごころなく信樂す

せつしゅ

れば、摂取のひかりのなかにをさめとられ

だいねはん

まゐらせて、かならず大涅槃のさとりをひ

らかしめたまふは、すなはちれふし、あき

人などは、いし・かはら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとしとたとへたまへるなり。摂取のひかりと申す

あみだぶつ おん

せつしゅ

は、阿弥陀仏の御ころにをさめとりたまふゆゑなり。

「如来の誓願を疑いなくひとすじに信じれば、摂取の光明の中に摂め取られて、必ず大いなる仏のさとりをひらかせる」Ⅱ「漁獵を営む者や商いを営む者などは、石や瓦や小石などを見事に金にしてしまふ」と解して、阿弥陀さまの摂取の光明のはたらきは、「漁獵や商いを生業とする人は、瓦礫のような、ただそれだけでは価値がないものを、輝きあるものにするようなもの」と解しました。

文法的には、間違っているかもしれませんが、河田光夫氏の「被差別民の歴史的存在は、親鸞思想の「対象」ではなく根源であり、それを人類的存在として認識し、普遍化したのである。」によるならば、「屠沽の下類」と言われる（親鸞聖人は「愚縛の凡愚」と同類で「われら」とおっしゃる）獵師・商人は、人が嫌がりやりたがらないことを生業として、「人非」と蔑まされながらも、人々の生活を支えていました。そのことが、私には「ぞうきんの詩」と重なる思いを持つのです。阿弥陀さまのお心は、私の心を包まれても、雑巾のように汚れることはないのですが。現実的には、空気のような存在ではなく、私自身が蔑む人こそが、私を仏にしようとはたらいっていることに心を向け、阿弥陀さまのご本願に照らされていると、知らされることなのではないでしょうか。

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

『鎌倉殿の13人』も、承久の乱で後鳥羽上皇が隠岐に流され、北条義時が亡くなつて、最終回となりました。政権が朝廷から武家が変わるとき、親・兄弟であろうが、親戚関係、友人関係であろうが、（やむを得ずかもしれないが）争いの絶えない時代が画かれておりました。特に、主人公の北条義時が、若い頃は、心優しく人のことを思いやり、人の思いを聞き、意見を尊重する人だったのに、だんだんと力を得るに従つて、形相も心も変わっていく模様が画かれ、時折、若い頃の心が蘇ってきているような場面もありました。

恵信尼さまの親戚にあたる十三人の御家人の一人の三善康信は、気弱な優しいおじいさんのイメージでキャスティングされていましたが、最終回、後鳥羽上皇を討つのに、京に「今すぐ行くべき」と強く進言しました。最期の最後で、良いか悪いか、十三人らしい？ところを見せました。

承久の乱で後鳥羽上皇が隠岐に流されたのは、一二二一年七月でした。その一ヶ月後、聖覚法印が『唯信鈔』を表します。また、三年後に、一二二四年、親鸞聖人は、五十二歳、稲田草庵で、『教行信証』をお書きになり、晩年まで、校正を重ね、修正されました。

親鸞聖人が『教行信証』をお書きになった理由の一つに、法然聖人の『選択本願念仏集』に

対して、一二二二年に、明恵上人が著わした『改邪輪』に対して、特に「菩提心」のことに応える意図のもと、作成されたと言われております。

『教行信証』は、一二二四年から書かれたことではなく、同書「化巻」に、仏滅の算定を解釈するところで、末法の時期を著わす文に次のようにお書きになっています。

しかれば穢悪・濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る。今の時の道俗、おのれが分を思量せよ。

三時の教を案ずれば、如来般涅槃の時代を勘ふるに、周の第五の主穆王五十二年

壬申に当れり。その壬申よりわが元仁元年 元仁とは後堀川院諱茂仁の聖代なり

甲申に至るまで、一千一百七十三歳なり。また『賢劫経』・『仁王経』・『涅槃』等の説によるに、すでにもつて末法に入りて六百七十三歳なり。

ここに、「元仁元年」（一二二四年）とあり、『教行信証』の草稿本が成立したと見られます。その前から構想があり、書き始められておられるは確かだと思えます。

浄土真宗本願寺派では、この年を浄土真宗の「立教開宗」と位置づけ、この度、親鸞聖人御誕生八五〇年に併せて「立教開宗八〇〇年」を期して慶讃法要が営まれます。

覚如上人は『報恩講式』の中で、「一 真宗興行の徳を讃ず」ともおっしゃっており、親鸞聖人は「浄土真宗」という宗派を起こそうとは、微塵もお思いではなかったでしょうが、後世の私たちにとっては、親鸞聖人が『教行信証』を著述され遺してくださったからこそ思うことは大であります。

また、『教行信証』の「後序」で、承元の法難の時のことが書かれています。最初は、「興福寺ノ学徒、太上天皇今上聖曆承元丁卯ノ歳仲春上旬の候、奏達ス。主上臣下、法二背キ義二違シ忿ヲ成シ怨ヲ結ブ。」と、はつきりと後鳥羽上皇のお名前を明記しておられませんでした。おそらく、隠岐に流されてから書き足されたのでしょう。

しかし、法然聖人から「怨みは怨みしか生まない」ことを重々お聞きだった親鸞聖人です。後鳥羽上皇のお名前を書き残されたのは、終生その怒りを忘れないがためであつたのでしょうか？後世に伝えておきたいがためであつたのでしょうか？時の権力へ抗う姿勢でおられたのでしょうか？どうもしつくりいきません。

隠岐に流され、隠岐で六十歳で亡くなった後鳥羽上皇は、ドラマでは、鎌倉幕府を敵対視し、時折、蹴鞠や和歌を詠んでいる場面もありましたが、暴君のように画かれていました。

政治と信仰を切り離すものではないとは思いますが、院政の時も仏教を信仰していたようです。また、テレビでも慈円和尚とよくつるんでいました。九条兼実と同じように、法然聖人の授戒を受け？法然聖人のお弟子である聖覚法印と親しかったそうです。慈円は『愚管抄』で後鳥羽上皇のことは善くは言っておりません。

後鳥羽院『無常講式』について、拙著『親鸞物語―泥中の蓮華』に次のようにあります。

延応元（一二三九）年、親鸞が京に帰って四年目のことであつた。後鳥羽上皇は、在島一九年にして六十歳の生涯を閉じた。わずかな付き人に見守られての寂しい最期であつた。しかし上皇の内面は外見に反して豊かであつた。

専修念仏弾圧を行つた後鳥羽上皇であつたが、その後、幾度となく聖覚から専修念仏の教えを享受していた。聖覚は上皇が配流によつて世の無常に落涙すると、そのひと月後、『唯信抄』を著し院の下に送つた。

「すでにひとへに極楽をねがふ、かの土の教主（阿弥陀仏）を念ぜんほか、なにのゆゑか他事をまじへん。電光朝露（でんこうちょうろ）のいのち、芭蕉泡沫（ばしょうたかた）の身、わづかに一世の勤修をもちて、たちまちに五趣（しゆ）（天上・人間・餓鬼・畜生・地獄。五趣。五惡道）の古郷をはなれんとす」（『唯信抄』）

仏道には聖道門と浄土門の二門があり、浄土門こそが末法の世の衆生にかなうものであり、その浄土門にまた諸行を励んで往生を願う諸行往生と、称名念仏して往生を願う念仏往生とがある。自力の諸行では往生をとげ難い旨を示して他力の念仏往生こそ仏の本願にかなう道であり、阿弥陀仏の本願を信じ、ただ念仏一行をつとめる専修のすぐれていることを明らかにし、念仏には信心を要とすることを尽くし丁寧に述べたものであつた。

後鳥羽院は配流の縁を得て、聖覚をはじめ浄土教の先師に導かれて、年来の雑信仰と決別し

ひとりの念仏の行人として信仰の味わいを深めていった。そして上皇は隠岐島で『無常講式』を著して往生した。

「おおよそはかなきものはひとの始中終、まぼろしのごとくなる一期のすぐるほどなり。三界無常なり、いにしえよりいまだ万歳（まんざい）の人身（にんじん）あることをきかず、一生過ぎやすし。いまにありてタレか百年の形体をたもつべきや。われや先、人や先、今日ともしらず、明日ともしらず、おくれさきだつ人はもとのしづくすゑの露よりもしげし・・」

その『無常講式』の最後の結びは、奇しくも専修念仏集団弾圧の原因ともなつた『六時礼讃』の御文「この諸の功德によつて、願はくは命終の時に望みて、無量寿仏の無辺の功德身を見たてまつらん。われおよび余の信者、すでにかの仏を見たてまつりをはりて、願はくは離垢の眼を得、安樂國に往生せん」を引いてわが信心の帰する処を語っている。

上皇往生の後、洛中では後鳥羽院は聖覚を沙如来として拝していたという噂が立つた。親鸞もその噂を聞いて「或人ユメニミラク」とその伝承を書写した『唯信抄』の紙背に記した。

【無常講式】

一卷。後鳥羽上皇（隠岐法皇）撰。承久の乱に伴う隠岐配流後の著作であると考えられる。本文は三段に分けられ、初段には五道六道の苦を厭い安養の淨刹に生ずること欣い、前仏と後仏の間には阿弥陀仏の悲願に憑むべきであると述べて世の無常を語り、二段には上皇が体験した無常を語り、三段には仏・菩薩に帰依して弥陀

の名号を称えて命終に安樂國に往生することを願うことを語っている。仁和寺蔵写本は国重要文化財に指定されている。

※上皇は、承久の乱（一二二一年）によつて隠岐島に流罪となり、そこで生涯を閉じられた。そのような後鳥羽上皇は、世の無常を感じ最後には、阿弥陀如来がまします浄土へ往生したいという意で、この『無常講式』を著されたのであろう。親鸞聖人は『御消息』（第二五通）で、関東での念仏禁止の訴訟について尽力した性信に「このやうは、故聖人（源空）の御とき、この身どものやうやうに申され候ひしことなり。こともあたらしき訴へにても候はず」と、この弾圧事件にふれられ「さればとて、念仏をとどめられ候ひしが、世に曲事のおこり候ひしかば」と、念仏を弾圧する者は当然の報い（曲事とは、承久の乱による後鳥羽上皇の隠岐への遠島を指す）を受けるといわれている。また、念仏をやめれば弾圧した者が報いを受けるので念仏を止めてはいけなさとされる。

（WikiDharmaより）

親鸞聖人は『教行信証』の後序に、「もしこの書を見聞せんもの、信順を因とし、疑謗を縁として、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。」と述べておられます。

阿弥陀さまのご本願を誘っていた人々も、それが縁となつて、必ず、阿弥陀さまのご本願によつて、浄土往生を遂げると、確信をもつておられたと思います。後鳥羽上皇もそのお一人ではなかったでしょうか。

親鸞「教行信証」 悩み考え抜いて至った逆説

大澤真幸が読む

『教行信証』は、ほとんど經典等からの引用から成る。が、引用を通じて、紛れもなく親鸞本人が考え、悩んでいる。何について？最も重要な主題は、「信ずること」の困難と逆説である。

親鸞が師法然が基礎づけようとしたのは、普遍的救済ということだった。阿弥陀如来によって、全ての人が平等に極楽浄土へと往生することが許されているはずだ。もともと、救済されるためには人は信じなくてはならない。阿弥陀の力（他力）を信じ、浄土に生まれるという心を起こしたことを示す行為が必要だ。その行為は易しいものでなくてはならない。難しいと、それができるエリートしか救われないことになるからだ。ここから「念仏一行の選択（せんぢやく）」という思想が出てくる。南無阿弥陀仏と称えれば、誰もが救われる。

だが考えてみると、信ずることこそ難しい。これが親鸞がぶつかった問題である。念仏を称える救済が確実なら、往生しなくても、今ここで自然と喜びがわいてくるはずだ。合格通知をもらえば、入学する前から嬉（うれ）しいだろう。だから『教行信証』の「信巻」の中心概念は「信楽（しんぎょう）」である。信仰は楽しいのだ。

それなのに、親鸞はこうも書く。なぜか喜びの感情が出てこない、と。ということは自分が真に信じているのか、信じていることができていないのか、疑わしい。

ここから極限の問いが出る。仏の教えを信じられない悪人、懷疑心が消えない悪人でも救われるのか。父王を殺した阿闍世王（あじやせおう）や、彼に殺人を唆（そ）された提婆達多（だいばだつた）でも救われるのか。もし救われるのなら、信じていなくても信じているのと同じ、というふしぎな逆説に至る。

私の解釈では、この逆説をそのまま実現すると還相廻向（げんそうえこう）になる。還相廻向とは、浄土に往生した者が菩薩として戻り、衆生を救うことだ。死後の幸福を約束するだけでは足りない。信じていることができない不幸な悪人さえも、浄土に行つたときに得るはずの喜びをこの世で感じられるようにこの世を変革すること。これが還相廻向だ。

（朝日新聞二〇一九年十一月十六日掲載）
※原文では「唱える」ですが、あえて「称える」に変えてあります。

教行信証を書かれた目的

親鸞聖人は、『教行信証』の最後、「後序」に『教行信証』を書かれた目的をこのように記されています。

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これによりて真宗の詮を鈔し浄土の要を撫ふ。ただ仏恩の深きことを念うて人倫の嘲りを恥ぢず。もしこの書を見聞せんもの、信順を因とし、疑謗を縁として、信楽を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。

「これによりて」とは、この喜びからです。「真宗の詮を鈔し、浄土の要をひろう」とは、絶対の幸福に救い摂られた喜びから、真実の仏教の、大事なところを抜き出して、拾い集めたのが『教行信証』です。『教行信証』は仏教のエッセンスなのです。しかし「大衆は常に間違う」と言われるように、迷

いの深い私たちには、真実はなかなか受け入れられません。あまりに常識破りなことが書いてあるので、きつと非難攻撃を受けるだろう。だが「唯仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲を恥ぢず」。人から非難攻撃されることは辛いけれど、阿弥陀如来に絶対の幸福にして頂いたご恩返しができないほうがもっと辛い、阿弥陀如来のご恩を思えば問題にならないということです。ではどうすればご恩返しになるかというと、阿弥陀如来は、すべての人を本当の幸せに救おうとされていますので、阿弥陀仏の救いを一人でも多くの人に伝えることが一番のご恩返しになります。もしご縁あつて『教行信証』を読む人は、「信順を因と為し、疑謗を縁と為し」とは、「ああ尊い本だな」と信ずる人もあるだろう、「とんでもない本だ」と思う人もあるだろう。信ずる人は信ずることを因として助かつてもらいたい、疑ったり誇ったりする人は、疑謗を縁として助かつてもらいたい、助かるんだ。信じる人も、疑う人も、すべての人に幸せになつてもらいたい、ということなんです。幸せになつてもらいたいといっても、「信楽を願力に彰し」ですから、「信楽」とは絶対の幸福のことです。阿弥陀仏の本願力によって、絶対の幸福になつてもらいたい、ということなんです。「妙果を安養に顕さん」とは、「妙果」とは阿弥陀仏と同じさとのこと、「安養」とは阿弥陀仏の浄土のことです。生きているときに絶対の幸福になつた人は、死ねば阿弥陀仏の浄土へ往つて、阿弥陀仏と同じさとの心を開けるんですよ、どうか生きているときに他力の信心を獲得してもらいたい、ということなんです。のように、親鸞聖人が『教行信証』を書かれた目的は、一人でも多くのご縁のある人に本当の幸せにしたい、ということなのです。

（「浄土真宗 J P」より抜粋）

稱讃寺 行事予定

二〇二三年 一月の行事予定

六日(金) のんのん法話会 一四時

一六日(月) のんのん法話会 一四時

二六日(月) のんのん法話会 一四時



※住職は、十二月二十九日(木)から一月四日(水)まで、鹿児島・稱讃寺に滞在しております。

慈光 いくしゐ

光らっ まれて

二〇二三年「心のともしび」一月カレンダーより

「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申し上げます。

合掌

記

1. 募金の名称 浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金
「ウクライナ緊急支援募金」

2. 受付口座番号

〈郵便振替〉 01000-4-69957
加入者名 たすけあい募金

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちょ銀行
店名 一〇九(イチゼロキュウ)店
番号 当座 0069957
名義 たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

編集後記(愚案)

『高僧和讃』(善導讃)に

こころはひとつにあらねども

雑行・雑修これにたり

浄土の行にあらぬれば

ひとつへに雑行となづけたり

とのご和讃があります。

この間、大谷翔平選手の試合中の笑顔の純度を測定をテレビで放送していました。ピッチャーで打者を三振に取った時、打者でホームランを打った時、ベンチで談笑している表情を測って見たところ、満面の笑顔でも100%にはなりません。笑顔でも、悲しみや怒りが含まれていたりますのです。私は、私のころも体もこの一つと思いがちであります。顔の表情でさえ一瞬一刹那たりとも、ひとつではないのです。私のころはただ一つではなく、それも全て真実清浄なもの何一つないのであります。清く正しく美しく思えるようなころもありそうです。が全ては煩悩でしか過ぎないのです。「大悲無倦常照我」と阿弥陀さまは常に私を照らしてくださっておられます。私のころは一つではないからその一つ一つを包んでおられる。だから、阿弥陀さまは私のころの外からも内からも照らしてくださっておられるのです。「つつむ」とはそういう意味ではないでしょうか。